

白楽天と吉川英治

杉下 元明

一

吉川英治の『新・平家物語』は昭和二十五年から三十二年にかけて「週刊朝日」に連載された。現在、講談社「吉川英治歴史時代文庫」や新潮文庫などで読むことができるが、「かまくら殿の巻」の最後は高倉院と小督の挿話をしるしたあと、「このはなしは、元より真実を伝えたものではない」として次のようにしめくくる。

似たような御事蹟も、じつは、あったかどうか、疑問である。

唐朝の詩人白楽天の『長恨歌』に詠まれた玄宗皇帝と楊貴妃の恋をとって、平家物語の作者が、大和調な文体に移し、小督と天皇のことに書き直したものであると、説を立てる学究もある。

おそらく、そうであろう。そういう例は、ほかにも少なくない。

文学のうえばかりでなく、絵画にも、工芸にも、宗教にも、あらゆる部門に、多いのである。思想すらも、移植であつた。

けれど、移植が移植のままではなかった。この国の風土による調和作用を経ると、ふしぎに、この国の国初めからあるような開花と盛りを見せるのだった。（『新・平家物語（八）』一六七ページ）

「吉川英治歴史時代文庫」（以下「歴史時代文庫」と略す）に従って頁数をしるした（以下も同様。なお、一部ふりがなを略した）。たとえば昭和二十八年刊行の『新・平家物語 第十二巻 かまくら殿の巻』（朝日新聞社）では旧字・旧仮名遣いであるほか、「あつたかどうか」ではなく「有つたか何うかも」、「少くない」ではなく「少くない」とするような表記の違いがあるけれども、本稿で「歴史時代文庫」を底本としたのは理由が二つある。広く流布していること、および、「註解」がそなわっていることである。

さて、「長恨歌」は百二十句から成る長詩である。唐の玄宗皇帝と楊貴妃の恋を題材に、皇帝に見出された妃の栄光と、叛乱のなかで妃が落命し、妃の死後に皇帝が悶々としてねむれぬさまが描写され、その後、道士がつかわされて、仙女となった妃と対面し、形見の品と妃の言葉とを受けて皇帝のもとへもどるまでがえがかれる。⁽²⁾ 帝に寵愛された女性が姿を消すという構成そのものが、天皇と小督の關係に共通するのである。まこと白楽天（白居易）の詩が平安時代以来、多くの文学作品の発想の契機となり、あるいは表現を洗練するにあずかったことはよく知られている。『枕草子』で、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と問われた清少納言が、白楽天の「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」という白楽天の詩句を踏まえて御簾を上げた⁽³⁾という逸話は人口に膾炙しているし、『源氏物語』桐壺が、妃の死後に帝がなやみ苦しむという筋立てであるのは「長恨歌」に由来するという説も、よく知られているであろう。ほかならぬ吉川英治の小説にもまたさまざまな形で白楽天の詩——第一には「長恨歌」、次に「琵琶行」が影響している（「琵琶行」は八十八句から成り、江州司馬に左遷された作者が、落ちぶれた名妓の弾く琵琶を舟中で聞き、我が身にひきくらべるという内容である）。

「琵琶行」についていえば、『私本太平記』や『宮本武蔵』にこの詩の引用があることは、かつて拙稿『私本太平記』札記（『太平詩文』六十三号。平成二十六年十一月）で述べた。このうち『宮本武蔵』については第四章でも触れよう。

『私本太平記』札記⁽⁴⁾では触れなかったが、最晩年の『新・水滸伝』の「根はみな『やくざ』も仏心の子か。黒旋風の李達お目見得のこと」の回にも「琵琶行」の引用がある。やや長くなるので、二に分けて引用したい。

宋江はこれを暗誦^{くらん}じていた。

乙女の琵琶はすでに絃をかき鳴らし、その紅唇からもれる詩^{うた}の哀調に一座は水を打ったようにひそまりかえった。

潯陽江頭 夜 客を送れば

楓葉 荻花 秋索々たり

主人は馬より下り^お 客は船にあり

酒をあげて飲まんとするに管絃なし

酔うて飲をなさず 惨として将に別れんとす

別るるとき 茫々 江は月を浸せり

忽ち聞く水上琵琶の声

「……ああ」宋江は、ついに涙をたれた。故郷が偲ばれてきたのである。老父は琵琶が好きだった。「もしこれがと
もに聴ける琵琶であつたら」と悔やまれ、身の不孝にさいなまれていたのらしい。

声を尋ねて 暗^{ひそ}かに問う 弾く者はたれぞと

琵琶の声はやみ 語らんとするも遅し

船を移し 相近づき むかえて相見る

酒をそえ 灯をめぐらし 重ねて宴を開く

千呼万喚 始めて出で来たるも

なお 琵琶を抱きて 半ば面を遮^{さへ}ぎる

軸を締め 絃^{いと}を撥^{はら}いて 三両声

まだ曲調を成さざるに 先ず情あり（『新・水滸伝（二）』三五五―三五六ページ）

まずここまで引かれているのは、「琵琶行」の第一～七句と、第九～十六句である（なぜか第八句がはぶかれている）。なお第二句を『古文真宝』『唐詩三百首』などでは「楓葉荻花秋瑟瑟」とする⁽⁵⁾。

『新・水滸伝』の引用をつづける。

「……」

宋江はまた不思議な感に打たれた。灯は冴えて座中、声もないのは奇異でもないが、その顔ぶれは李俊、張横、穆弘、穆春、薛永、童威、童猛、どれをみても血臭い野性の命知らずだ。その荒くれどもが、かくも生れながらの嬰兒^{あかご}のように純な姿で神妙に首うなだれて聞き入っているのはいったい何の力なのか？

絃々に抑え 声々に想い

平生 志を得ざるを訴うるに似たり

眉を低れ、手にまかせて 続々と弾き

説きつくす 心中 無限の事

「……そうだ、こんなやりばのない想いは、いまの若い者の胸にはいつぱいなのだ。それを汲んで生かしてやれない
宋朝治下のみだれが今日のような世相をつくり、その反抗が梁山泊などになっていくのか」

耳は絃に打たれながら、宋江は自問自答を独り胸にささやいている。曲はすすみ、大絃は嘈々、小絃は切々――

（『新・水滸伝（二）』三五六ページ）

ここで引用されているのは第十七～二十句。また「大絃嘈嘈」「小絃切切」は第二十三・二十四句にもとづき⁽⁶⁾、このあと第三十五～三十八句、第四十一～四十七句、第五十一～六十二句などが引用される。異同については、ほかにも問題があるものの、第十八句は『白氏文集』『全唐詩』などでは「似訴平生不得志」だが、『唐詩三百首』『古文真宝』などでは「……不得意」であることを指摘しておこう。第二句の異同とあわせ、吉川英治は「琵琶行」を『唐詩三百首』や『古文真宝』で

読んでいたのではないことが窺える。

「琵琶行」についてはさらに、戦中の作である『新書太閤記』には、次のセリフがある。

この潯陽城の船着きは、むかし白楽天とかいう詩人^{うんぴと}が、琵琶行つていう有名な詩を遺した跡だっていうんで、琵琶亭があるし、それから船で琵琶を弾いて、旅のお客さまに伽^{おんな}をする妓^{おんな}がいるんです（『新書太閤記』（二）『二二ページ』）

一方、『新書太閤記』と「長恨歌」の関係はどうであろうか。

美濃の斎藤氏が織田信長の攻撃を受ける場面に次のような一節がある。

後宮の美姫三千とはいわない。けれど、一笑すれば百媚生ず、といえるぐらいな美人は何人かある。（『新書太閤記』

（三）『一七三ページ』）

この描写は「長恨歌」第十九句の「後宮の佳麗三千人」や第七・八句の「眸を回して一笑すれば百媚生ず／六宮の粉黛は顔色無し」という表現に由来している（訓読は、かりに簡野道明『和漢／名詩類選評釈』に従う）。

あるいは武田勝頼が天目山でほろびる直前の場面では

また幼子の名を呼び交うなど——金釵環簪も道に委^{まか}して顧みるものなく、脂粉や珠玉も泥土にまみらせて惜しむ眼もなかったという。——長恨歌のうちにもある漢王の貴妃との長安の都を落ちる状^{さま}にも似て、道はすこしも捗^{はか}らなかった。

た。（『新書太閤記』（六）『三五八頁』）

と書かれているが、これは「長安の都を落ちる状」というよりも、楊貴妃の最期をえがいた「長恨歌」の第三十九句

花鈿委地無人收　花鈿地に委^あして人の収むる無し

に由来しているであろう（また「金釵」は第百八句、「泥土」は第五十三句に見える熟語である）。

しかし吉川英治の小説で、「長恨歌」の影響がもっとも大きく見られるものとしては、先に名の出た『新・平家物語』をあげねばならない。

二

『新・平家物語』でとりわけ「長恨歌」の影響が窺えるのは、冒頭の「ちげくさの巻」である。特に「乳^{めの}人の恋」の章には、次のように書かれている

——後宮の佳麗、三千人

三千の寵愛、一身にあり

金屋、粧ひ成つて、嬌として夜に侍し

玉楼、宴やんで、酔うて春に和す

姉妹弟兄、みな土に列す

憐れむべし光彩、門戸に生ず

つひに天下、父母の心をして

男を生むを重んぜず

女を生むを重んぜしむ

白楽天が、玄宗皇帝と楊貴妃との情事を歌った長恨歌の一節は、そのままが平安朝の貴族心理をいつているような趣がある。（『新・平家物語（一）』二〇七ページ）

ここで引かれているのは「長恨歌」の第十九～二十六句にあたる。藤原氏の娘が帝にとつぎ、外戚が権力をふるうことを、このようになぞらえたのである。

右にあげたのはわかりやすい形であるが、「鬼影」の章には、遠藤盛遠にころされた袈婆ノ前について「春ならば、梨花の一枝」（『新・平家物語（一）』一二五ページ）と言う会話がかわされる。これは「長恨歌」の第百句の「梨花一枝春^{はる}雨を

帯ぶ」という表現によったものであろう。明記されていないだけに、読みとった読者の微笑をさそふ。

してみれば「鞠」の章の例はどうであらうか。

頼長の得意は、いうまでもない。光彩は門にみち、家福は園えんにあふれる東三条亭であつた。（『新・平家物語（一）』

三四四ページ）

藤原頼長が娘を天皇にとつがせた場面である。平安時代、藤原氏が娘を帝にとつがせることで権勢をふるったことについては前述したが、この描写は「長恨歌」の第二十四句に由来する表現であらうとおもわれるのである。

『新・平家物語』をはじめ吉川英治の歴史小説は、低俗な時代小説とちがって、今も少くない読者に愛読されている。それには文章の格調などもあづかつているであらうし、こういった漢詩に由来する表現が文章の格調をささえていることは、想像に難くない。

さて、『新・平家物語』の「石船の巻」では、二条天皇と藤原多子まさるこ（二代后）について、「長恨歌」第十五句・十六句によった描写がある。⁽⁸⁾

あるいは「御産の巻」の「鴛鴦吟」の章。高倉天皇が紅葉を愛した逸話について「しかも、その紅くれなゐの美しさは、この一本のために、六宮ノ粉黛モ顔色ナシ」といいたいほどだった」（『新・平家物語（五）』四二六ページ）という描写があり、これは楊貴妃の美しさをたたえた「長恨歌」の第八句である。ちなみにこの描写のややあとに「林間ニ酒ヲ煖メテ紅葉ヲ焼タク」という白楽天の詩句（『送王十八帰山寄題仙遊寺』）も引かれるが、これは『平家物語』巻六にみえる逸話をそのまま生かしたものである。

物語も終盤に近づいた「静の巻」では「つらら簾」の、静が源義経に従って吉野をさすらう場面で

ほっとした安心感に、疲れも忘れ、静は何か恍惚としていた。——かの玄宗皇帝が、天上にある貴妃を恋うて、夢に、その西廂をたたき、貴妃の魂魄を驚かせたという長恨歌のあの一章もさながらであつた。（『新・平家物語（十

五)「一三七ページ」

と書かれているのは、第八十九〜九十二句に

金闕西廂叩玉局 金闕の西廂に玉局を叩き

転教小玉報双成 転た小玉をして双成に報ぜしむ

聞道漢家天子使 聞道く漢家天子の使なりと

九華帳裏夢魂驚 九華帳裏夢魂驚く

とあることによる。厳密には、皇帝が夢で西廂をたたいたのではないけれども。

もう一例あげよう。「火乃国の巻」の「雪ノ御所」の章である。

迦葉は、そのためにも、雪ノ御所には、なくてはならない女性だったろう。——ほかにもいる大勢の舞踊の生徒たち
にたいし、迦葉は、指揮者であり、女監督でもあった。唐朝の後宮制度に「阿監」というのがある。かの女の役は、
それと似たものであったろう。(『新・平家物語(五)』二四六ページ)

吉川英治が「阿監」という熟語を知っていたのは、あるいは「長恨歌」にしたしんでいたためかも知れない。「長恨歌」
の第六十六句に「椒房の阿監青娥老ゆ」とあるからだ。

最後につけ加える。「断橋の巻」の「御家人集め」の章には

書状は同様に、都の情勢をつたえ、終わりの方に、

春風桃李、花ひらく夜か

秋雨梧桐、葉落つる時か

と、謎みたいな詩句が書いてあった。(『新・平家物語(七)』一九二ページ)

という一節があり、「長恨宮」の章にも次の例がある。

鳥羽離宮の翠帳ふかき処、春風桃李花ひらく夜か、秋雨梧桐の葉落つるの時か——ただ一個の男性としての上皇が、頬をぬらして語り給う少年の日の思い出を——美福門院も、おん涙をともしにして、聞かれることがあるであらう。

（『新・平家物語（一）』二二九ページ）

これらは「長恨歌」の第六十一・六十二句に

春風桃李花開夜　　春風桃李花開く夜

秋雨梧桐葉落時　　秋雨梧桐葉落つる時

とあることによっている。「春風桃李」の対句が「長恨歌」の第六十一・六十二句によっていることは前述した。ちなみに劍豪宮本武蔵に、この対句を書いたものがのこっているという⁹。元来この対句は、楊貴妃が亡くなったあとの玄宗皇帝の寂しい月日をうたった表現だが、およそそういう恋情に無関心に見える宮本武蔵がこの詩句を書きのこしていることは、興味深い。

三

宮本武蔵はいうまでもなく吉川英治の長篇小説の主人公でもある。昭和十^一十四年に朝日新聞に連載された『宮本武蔵』にはその名も「連理の枝」という章があり、そこには白楽天の詩がさまざまに影を落としている。

まず「連理の枝」二で、武蔵を恋いしたう「お通」が、城太郎少年にむかつて次のようにかたる。

「たとえ生きても死んでも、離れていても、お互いの心は、比翼の鳥のように、連理の枝のように、固く結ばれているものと信じていますから、ちっとも淋しくなんかない。……ただ武蔵様が、武蔵様のお心のままに、修行の道へすすんでお出で遊ばすように、祈っているばかりなんです」（『宮本武蔵（五）』七五ページ）

「連理の枝」と「比翼の鳥」が「長恨歌」に由来することはいうまでもない。「長恨歌」の第百十七・百十八句は、次のような対句である。^⑩

在天願作比翼鳥 天に在つては願はくは比翼の鳥と作らん

在地願為連理枝 地に在つては願はくは連理の枝と為らん

さらにそれにつづく「連理の枝」三では、お通が武蔵からの手紙を受けとり、次のように喜ぶ。

安祿山の叛乱に、兵車の軌のもとに楊貴妃を失った漢皇が、のち貴妃を恋うのあまり、道士に命じて、魂魄をたずねさせ、道士はそれを、上は碧落の極み、下は黄泉にいたるまでさがしもとめ、遂に、海上の蓬莱宮中にその花貌雪膚の仙子を見出して、帝の意をつたえたというあの長恨歌の中にある、貴妃の驚愕と喜びの涙が——そのまま自分のことでもあるように、お通は茫然として、短い手紙を、見も飽かず、繰りかえしていた。（『宮本武蔵（五）』七八ページ）

この描写は、「長恨歌」の第七十五句から第百句までにほぼ対応する。

臨邛道士鴻都客 臨邛の道士 鴻都の客

能以精誠致魂魄 能く精誠を以て魂魄を致す

為感君王輾轉思 君王輾轉の思を感じるがために

遂教方士殷勤覓 遂に方士をして殷勤に覓めしむ

排空馭氣奔如電 空を排し氣に馭して奔ること電の如く

昇天入地求之遍 天に昇り地に入り之れを求むる遍し

上窮碧落下黄泉 上は碧落を窮め下は黄泉

兩處茫茫皆不見 兩處茫茫 皆見えず

忽聞海上有仙山

忽ち聞く 海上に仙山有り

山在虚無縹緲間

山は虚無縹緲の間に在り

楼阁玲瓏五雲起

楼阁玲瓏として五雲起こり

其中綽約多仙子

其の中綽約仙子多し

中有一人字太真

中に一人の太真と字する有り

雪膚花貌參差是

雪膚花貌 參差として是なり

(略)

玉容寂寞淚闌干

玉容寂寞として淚闌干たり

梨花一枝春帶雨

梨花一枝 春 雨を帶ぶ

これらを伏線とし、お通は「二本の巨きな合歡の樹」を見て次のように城太郎にかたるのである。

「長恨歌を知っているでしょう。白楽天という人の作った詩」

「ああ」

「あの長恨歌の終りのほうに——天に在つては願わくは比翼の鳥と作らん、地に在つては願わくは連理の枝と為らん

——という句があるでしょ。あの連理の枝というのは、こんな樹のことをいうのじゃないかしらと、さつきから思っ

ているんですの」

「連理って?……何」

「枝と枝、幹と幹、根と根、二つの物でありながら、一つの樹のように仲よく立って、天地の中に、春や秋を楽しんでいる樹のこと」

「なんだあ…自分と武蔵様のことをいってるんじゃないか」

「いけない、城太さん」（『宮本武蔵（五）』八四ページ）

『新・平家物語』の冒頭の巻の、平安貴族の世界観は「長恨歌」をおもわせるというくだりが、第二章にあった。「連理の枝」という章の名そのものが象徴的であるが、『宮本武蔵』に於ける主人公とヒロインの恋物語をえがくという構成は、「長恨歌」から吉川英治がまなんだという可能性も考えられよう。

なお「連理の枝」の章ばかりではなく、「春・雨を帯ぶ」という章もある。章の名は、さきに見た「長恨歌」の第百句からとったものであり、その「三」で、長岡佐渡（松井興長）が真田幸村をたずねる場面に由来する⁽¹⁾。

そればかりではなく、クライマックスに近い「待宵舟」五で、お通は武蔵との対面を直前にひかえ、「比翼の鳥」「連理の枝」という表現を踏まえた感想を漏らす場面もある⁽²⁾。

以上、「長恨歌」がいかに『宮本武蔵』を彩っているかを列挙してみた。

四

『宮本武蔵』に影響した白楽天の作品は、「長恨歌」だけではない。「断絃」三では吉野太夫が武蔵に向かい、琵琶についてかたる場面がある。第一章で触れたように、ここで「琵琶行」に言及される。

「白楽天の『琵琶行』という詩のうちに、琵琶の音いろがよく形容されてありました。——それは」

吉野は、細い眉をちよつとひそめながら、詩を歌う節でもなく、そうかといって、ただの言葉でもない低声で、

（『宮本武蔵（四）』一七四ページ）

とあり、つづけて「琵琶行」の第二十三―三十六句が引用される。

『宮本武蔵』と白楽天といえはもう一点、いささか問題のある箇所がある。お通が二本の巨きな合歓の樹を見て「長恨

歌」を思いだす場面があることは、すでに述べた。丁寧なことに彼女は城太郎に、「白楽天といたので思い出したんです」と言って話をつづける。

「いつか、城太さんが、烏丸様の御家来に教わっていた詩があつたわね。覚えている？……」

「長干行か」

「ええ、あれ。あの詩を、聞かせて下さいな。書^{ほん}を読むような節で結構ですから」

「……妾^{めかけ}が髪始^{はつ}メテ額^{かみ}ヲ覆^{おほ}ウ

花^{はな}ヲ折^をッテ門前^{かどまへ}ニ戯^{あそ}レ

郎^{らう}ハ竹馬^{たけうま}ニ騎^{また}シテ来^きリ

牀^{とこ}ヲ遶^{めぐ}ッテ青梅^{せいばい}ヲ弄^もス……」

城太郎はすぐ口誦^{くそく}さんで、

「この詩かい」

「そう。もつと続けて」

「……同^{どう}ニ長干^{ちやんかん}ノ里^りニ居^ゐリ

両小嫌猜^{りやうせうがい}ナシ

十四、君ノ婦トナッテ

羞顔^{しうがん}未ダ嘗^{かつ}テ開カズ

頭^{こゝ}ヲ低^ひレテ暗壁^{あんぺき}ニ向^むイ

千喚^{せんゑん}一トシテ廻^{かえ}ラズ

十五、始^はメテ眉^{まゆ}ヲ展^{ひら}ベ

願ワクハ塵ト灰ヲ同ニセン

常ニ存ス抱柱ノ信

豈上ランヤ望夫台

十六、君遠クへ行ク……」（『宮本武蔵（五）』八四～八六ページ）

「長干行」については説明が必要である。この詩は、夫が行商に出たあとの若い妻の回想という形をとり、『唐詩三百首』などにはいつて有名であるけれども、実は李白の作なのだ。勿論、「白樂天といったので思い出した」だけであって、白樂天の作といっているわけではないものの、誤解をまねきかねない一節である。ちなみに前述したように「歴史時代文庫」には「註解」がそなわるが、この「長干行」に一切言及していないのは物足りない。

なお、吉川英治はこの詩の作者には本当に無頓着だったらしい。おなじく戦前に新聞に連載された『三国志』でも、「三花一瓶」の章にこの詩を「十二、三歳の少女」がうたう場面がある（『三国志（一）』一二七ページ）。いうまでもなく、三国時代に唐詩を口ずさむ少女がいれば時代錯誤である。

もともとこのことは、吉川英治が、たしかめるまでもなく記憶でこの詩を書いたことの証拠であるということとは、考えられよう（故意に虚偽をしるす必然性はない）。国民的流行作家の向こう傷、名誉の負傷というべきものという仮説を、提示しておきたい。

五

吉川英治『三国志』随一の美女といえば、呂布をして恋にくるわせ、董卓を裏切らしめた貂蟬が思いだされる。その貂蟬を形容するために、何百年ものちに書かれた「長恨歌」がつかわれている。なかには登場人物による会話文もふくまれている。

るといったら、意外に感じる読者もいるにちがいない。

たとえば「傾国」の章で、彼女を見た董卓は「あまた佳麗はいるが、貂蟬のようなのはいない。もし貂蟬が一笑したら、長安の粉黛はみな色を消すだろう」（『三国志（二）』七七ページ）と感嘆するが、これは第一章でも出た「後宮の佳麗三千人」や「眸を回して一笑すれば百媚生ず／六宮の粉黛は顔色無し」によった表現とおぼしい。

「痴蝶鏡」の章で、彼女をめとった董卓について「太師のお目ざめが遅いわけは、昨夜、その美人を幸いして、春宵の短きを嘆じていらっしやることでしょう」（『三国志（二）』八三ページ）と噂されるのは、第二章で触れた、第十五句の「春宵短きを苦しんで日高くして起く」によったとおもわれる。

ちなみに管見のかぎり、吉川英治が参看したであろう『三国志演義』や『通俗三国志』にこれらの描写は出てこないようである。たとえば「太師のお目ざめが遅いわけは……」のくだりに対応するのは、久保天随『支那文学評釈叢書1／三国志演義』（明治三十九年、隆文館）では「次日、呂布府中に在りて打聴するも、絶えて消息を聞かず、布、逕に中堂に入り、諸侍妾に尋問す、侍妾対へて曰く夜来太師新人と共に寝ね、今に至って起きず、と、布大に怒り、潜に卓の臥房に入り、後より窺探す」とあるばかりだ。⁽¹³⁾

勿論、地の文でも同様の描写が何度も見られる。

「貂蟬は、とたんに、雨をふくんだ梨花のようにわなないて、（略）声なき想いを、眼と姿態にいわせて呂布へ訴えた」（『三国志（二）』八五ページ）とあるのは、第百句の「梨花一枝春雨を帯ぶ」である。

「人間燈」の章では、董卓を破滅させるという目的を達したあと彼女は死をえらぶ。遺体について「天然の麗質は、死んでからよけいに珠のごとく燦爛していた」（『三国志（二）』一三六ページ）と書かれているのは、第五句の「天生の麗質自ら棄て難く」を参考にしたものであろう。

いまひとつ、「傾国」の章で、彼女の髪形を形容して「雲鬢重たげに、呂布の眼を羞恥しながら、王允の蔭へ、隠れてし

まいそうにすり寄っている」(『三国志(二)』六八ページ)とある。即断はできないけれども、これは第十三句の「雲鬢花顔金步揺」によったのではあるまいか。

貂蟬の形容ではないが、「火か人か」の章には董貴妃について次のような描写もある。

貴妃は、雲鬢重たげに、

「いいえ……」と、かすかに花顔を横に振っている。(『三国志(三)』三五六ページ)

ここでは「雲鬢」と「花顔」がともに登場する。第十三句を意識していることは明らかである。してみれば貂蟬の描写について第十三句が影響をあたえているという推測の、傍証になるものであろう。⁽¹⁴⁾

白楽天の詩は我が国に移植され、『平家物語』や『枕草子』、『源氏物語』など絢爛たる花々を咲かせてきた。その伝統が昭和の大衆小説にいたるまで受けつがれていることを、本稿では確認し得たのである。

【注】

- (1) 小谷野敦『文章読本X』(平成二十八年、中央公論新社)は吉川英治について「ひらがなの使い方は学ぶべきで」と書くが、実際にはこのように単行本と後世の本でひらがなの表記がことなっている。確証はないものの、編集部が手を入れた可能性も高いのではなからうか。
- (2) 「江東史談」二四五号(平成五年三月)に田中義一「吉川英治の思い出／先生と長恨歌」という文章が載る。吉川英治が「長恨歌」を暗記していたこと、吉川筆の「長恨歌」が田中氏におくられたことなどが書かれており、興味深い。
- (3) 二百八十段。『新編／日本古典文学全集18』による。
- (4) 李逵が『水滸伝』に初めて登場するのは、百回本では第三十八回。第三十九回には宋江が尋陽江をおとずれる場面がある。
- (5) ちなみに井上靖に、このことに言及した「秋索々」というエッセイがある(『新書太閤記(十二)』三九七・三九八ページ)。
- (6) 『親鸞』の「女人編」に「峰阿弥がたり」という章があり、平家琵琶を聞きながら「大絃は嘈々として急雨のように、小絃は切々として私語のごとし」という形容のままだった(『親鸞(二)』八二ページ)という表現があるのも、「琵琶行」第二十三・二十四句にもとづく。
- (7) 原文は次のとおり。「撥を収めて 心に当りて画く／四絃の一声 裂帛のごとし／東の舟も 西の舟も、ひそまりて言なく／ただ見る

- 江心に秋月の白きを／いつか、宋江もすべてを忘れた。恍惚として身は司馬の客とともに舟中に在る気がしてくる。／——自ら言うもとはこれ京城の女／家は蝦蟇陵下にありて住む／十三にして 琵琶を学びえて成り／名は教坊の第一部に属す／曲罷りては 曾て善才を伏せしめ／粧い成りては 常に秋娘に妬まれ／五陵の年少は 争つて 纏頭を贈る／詩は、彼女の身の上を、こう歌つてゆく。／今年の歓笑、復た明年／秋月 春風 いつしかすく／弟は走りて 軍に従い 阿嬢は死し／暮去り 朝来たりて 顔色故びぬ／門前 冷落して 鞍馬も稀れに／老大にいたり 嫁して商人の婦となる／商人は利を重んじ 別離をかるんず／前月 浮梁に茶を買いに去る／去りてより以来 江口の空舟を守れば／舟をめぐる月明 江水に寒し／夜ふけて忽ち夢みるは 少年の事／夢に啼けば 粧涙は紅く 闌干たり」。
- (8) 「とはいえ、皇后多子は、どこまでも、聡明なお方であったから、かの玄宗皇帝と楊貴妃との情事を歌った白楽天の——春宵短キニ苦シミ日高ウシテ起キ、コレヨリ君王早ク朝セス——とあるような御行跡は決してなかった。むしろ、いかに夜は夜をおふたりきりのものとしてお過ごしになっても晨は夙におん身浄めをおすすめして、祖廟の御日拜と、政のおいそしみを欠くことのないように、常に、二条を励ましておいでになった」(『新・平家物語(四)』九ページ)。
- 「石船の巻」にはまた「楊氏の女の貴妃が、玄宗皇帝にえらばれて、華清宮の芙蓉の帳に寵せられたそれとはちがうが、形において、楊氏の一門とよく似た幸運が、平家一門に、それまでの貴族の門とは形をかえて、咲いたのだ」という描写もある(『新・平家物語(四)』八八ページ)。「芙蓉の帳」は、「長恨歌」第十四句の「芙蓉帳暖かにして春宵を度る」にもとづいていよう。
- (9) 吉川英治は『随筆宮本武蔵』におさめる「手紙の話」と『彼の筆跡』で、そのことに言及している。
- (10) 吉川英治には昭和十四年に『新作大衆小説全集 第二巻』として刊行された『江戸長恨歌』という小説もある。「連理」と「比翼」という二管の笛をめぐる物語が展開される。
- (11) 「柱は細く、天井は低めに、侘びたる荒壁の小床には、蕎麦の一輪ざしに、梨の花が一枝、投げてあった。／梨花一枝春帶雨／「……………」／客の佐渡は、白楽天の一句を想い起し、そして長恨歌にうたわれた楊貴妃と漢王との恋など、声なき嗚咽を聞く心地がしていたが——ふと、眼はそこに懸けてある一聯の書に、はっと打たれた。／五字の一行物である。筆太に、濃い墨で、どっぷりと大胆に——が、どこか無邪気で、稚いところをみせ、一気に、／豊国大明神／と書きくだしてあるのである。そしてその大字のわきに小さく「秀頼八歳書」としてあった」(『宮本武蔵(八)』一四ページ)。
- (12) 「もし、きょうという折を措いて、万が一にも、このままふたたびこの世で相見ることができないような不幸が——かりにもあったとしたら、悔いは百年の後も消すことができないであろう。／天にあつては比翼の鳥、地に在っては連理の枝とならん——と来世を願った漢帝の悔恨を、胸に歌に繰り返して、泣き死んでも追いつかないことである」(『宮本武蔵(八)』二三四ページ)。
- (13) ただし久保天随著のこの部分に「おもふに、呂布の眼中に在つては、宛然、梨花一枝春雨を帯ぶに似たらむか」という評釈はある。なお『通俗三国志』(昭和二年、有朋堂書店)では「董卓その夜は貂蟬に幸して、次の日午の刻まで起あがらず。呂布は早朝より相府に出て窺ひ見れども、董卓いまだ出ざりしかば、私に後堂へ入りて侍女に問ふ。侍女答へて申しけるは、太師は昨夜貂蟬と共に寐玉ひしが、今に至りて起玉はず」がこの部分にあたる。

(14) 『私本太平記』に、勾当内侍について「花^{かんばせ}顔」という形容が出てくるのも、「長恨歌」の「雲鬢花顔金步揺」という詩句によったものであろう。拙稿「『私本太平記』札記」参照。

(附記) 本稿は、平成二十九年三月の「言語と文芸の会」の例会発表にもとづきます。御教示をたまわった先生がたに御礼申し上げます。

【キーワード】・比較文学 ・大衆小説 ・日本近代文学 ・長恨歌 ・琵琶行